

XenosagaI・II - 第十一話 大地 - Erde -

ヘルマン：お召しでありましょうか、審問官長。

マーグリス：――先ほど、ミルチア太陽系圏で興味深い現象が観測された。

リヒャルト：へえ――それはどのような？

マーグリス：アニマの器による相互共振。これがなにを意味するか、わかるか？

ヘルマン：まさか――E.S. 同士の接触でありましょうか！

マーグリス：その通りだ。

リヒャルト：へえ、面白い。

マーグリス：我らのもとにあるE.S. は4機。あのU.R.T.V. が保持するシメオンを含め、残る8機が我々以外の手によって運用されている可能性がある。よって、貴様らに動いてもらう時が来たわけだ。

ヘルマン：では、私たちにもE.S. が――！

マーグリス：数千の異端審問官の中から見つけ出した、“因子を持つ者”だ。貴様らの働き、期待させてもらうぞ。

リヒャルト：我が名誉にかけて、誓いましょう――

マーグリス：では行け。

ヘルマン：はっ！

ペレグリー：――

マーグリス：――不満か？ 貴様の子飼いの審問官に俺が下命することが。

ペレグリー：そういう類の感情ではないわ。あれらはまだ未熟の徒。E.S. を御し得るとは思えない。ましてや、E.S. ガドもE.S. ヨセフもまだ――

マーグリス：結果さえ出ればよい。その結果、E.S. や搭乗者が失われようと、アニマの器は残る。あれはゾハルと時を同じくして発掘されたものを、ようやく復元したのだからな。

ペレグリー：――そういう考え方で、私にもE.S. イサカルを下賜されたというわけ？

マーグリス：貴様はあの小僧どもとは違う。俺はそれを知っていることを、お前は知っているはずだ。

――違うか？

ペレグリー：――――――

クーカイ・ファウンダーション 

ガイナン：――状況から判断して、U-TIC 機関の狙いは旧ミルチアにあるとみて、間違いない。

ヘルマー『旧ミルチア――』

ガイナン：妄念、執念――いまだにあそこには、そういったものが渦巻いている。

それに引き寄せられているのさ、連中は――アルベド――奴もそれに引かれている。

ヘルマー『アルベドだと？

そうか、E. S. 同士の戦闘があったと報告は受けていたが、あの男が生きていたか――』

ガイナン：奴は死なない――” その時 ” が訪れるまで――

曙光 

緋い外套の男：シメオンとアシエル 접촉、よろしかったのですね？

ヴィルヘルム：ああ、大勢に影響はないよ。アルベド・ピアソラー――彼は面白い。

アベルの方舟へと至る扉を開くことは、彼にしかできないしね。

緋い外套の男：ウ・ドゥとふたたび連結[リンク]する可能性が残りますが――

ヴィルヘルム：それはありえないね。彼にそこまでの力はないよ。あくまで鍵の役回り――

まあ、局所事象変移程度は覚悟する必要があるけれど、そのために君たちがいるわけだし。

でも――彼の意志は、素晴らしい輝きを放っている。

端役のままにしておくのは、少しもったいない。――そうは思わないかい？

大 - Erde - 地

ジギー：――以上で、報告を終了します。

ユリ・ミズラヒ『――了解しました。第二ミルチア首都宙港への侵入許可は下りています。
正式な引渡しまで、引き続き任務にあたるように。』

ジギー：はい。

――――――

――ミズラヒ博士。

ユリ・ミズラヒ『――まだなにか？ ジャン・ザウアーさん。』

ジギー：現在は、ジグラット・エイトです。

ユリ・ミズラヒ『そのようね。』

ジギー：モモが――

貴女にお会いできる日を、心待ちにしています。

ユリ・ミズラヒ『そう、私は――

私も、あなたがたとの対面を期待しています――

――――それは。』

Jr.：――なんか、怖がってるって感じだな、モモに会うのをさ。

ジギー：いずれにせよ、近日中にその時は来るはずだ。

Jr.：――なあ、おっさんさ、その体、炭素系の新型にバージョンアップしないか？

戦闘用レアリエンの技術を応用すれば、かなりいい線いくと思うぜ。

ジギー：いたずらに寿命を延ばす必要はない。

Jr.：あんたが長生きすると、モモは喜ぶぜ。

ジギー：――いや、遠慮しておこう。長く生きるつもりはない。

Jr.：そうか――気が変わったら、いつでも声かけてくれよ。

ジギー：――――――

モモ：あの――ママから通信が入ったって――

ジギー：すまない、たったいま、通信は終了したところだ。

モモ：――そう、ですか。ジギー、ママはなんて――？

ジギー：そうだな――とても、忙しそうだった。

モモ：やっぱり――

ジギー：接触小委員会を支える女性[ひと]だ。相当の激務なのだろう。

モモ：――そうですね、モモもママを手伝えるよう、頑張らなくちゃ。

ジギー： ああ、それと――近いうちに、彼女も第二ミルチアを訪れるらしい。

モモ： じゃあ、会えるんですね！

Jr.： ああ、楽しみにしてるって、言ってたぜ。

ジギー： ――――

モモ： ほんとですか！ 嬉しい――

ハマー： お、見えてきたっすよ。ほら、前方 10000――第二ミルチア首都っす。

マシューズ： よっしゃ、これで一仕事終了ってわけだ！

トニー： 百仕事くらい、こなした気分だけだな！

Jr.： そう言うなよ、追加手当、考えてあるからさ。

マシューズ： そう来なくっちゃ！ さ、お客さん方、着陸姿勢をとってくださいよ！

第二ミルチア

アレン： ここが第二ミルチアかぁ。ああ、生きてるってすばらしい――！

Jr.： ほんと、一時はどうなるかと思ったけど、なんとか到着できたな。

アレン： まったく 主任の無茶にはいつも冷や冷やさせられっぱなしで――

シオン： ――――

アレン： ―――主任？

モモ： シオンさん、もしかして――

キルシュヴァッサーのことを――

シオン： ！ ――――

やっぱり、わかっちゃう――？

アレン： 主任――

シオン： ごめんね、モモちゃん、アレンくん。

アイは――最後は――自分の意志で、道を選んだのよね。

モモ： ―――ええ。

シオン： でもね、私は認めたくない。あんな形でしか、自分の意志を表せないなんて――

もっと違う生き方をしていれば、違った表し方があったはず、違った意志を持てたはず――

Jr.： ああ、シオンの言う通りだ。ヤツにも、それを教えこんでやんなきゃな――

シオン: Jr. くん――

Jr.: なあ、俺たちはこのまま庁舎に向かうけど、シオンたちはどうするんだ？

シオン: うーん――

KOS-MOS の引渡しもあるし、このままヴェクター[うち]の二局に行くことにするわ。

いいわね、KOS-MOS？

KOS-MOS: はい、それで与えられた指令は完了します。問題ありません。

Jr.: そうか、仕事じゃ仕方ねえか。なあ、しばらくこっちにいるんだろ。あとえ遊びにでも行こうぜ。

――いろいろ、気分転換した方がいいからな。

シオン: ――そっか。うん、そうだよね。

(Jr. くんだけじゃない、私も過去を乗り越えていかなくちゃならないんだから――)

第二ミルチアならまかせて。いろいろ案内してあげるわね、モモちゃん。

モモ: はい、楽しみにしてます。

アレン: な、ななな、なんだ！？

ケイオス: これは――全域避難警報。

Jr.: 今度はなんだよ、おいケイオス、ヘルマーのおっさんに確認してみようぜ。

ケイオス: うん、そうだね――

！ これは――

――

ジン: ――やれやれ、騒々しいことですね。

――ほう。

E. S. が2機、ですか――。ついに動き出しましたか、大佐。

――

Jr.: E. S. だって！

ケイオス: ああ、それも2機、自治政府軍の防衛線を突破して、市街地に接近しているらしいよ。

Jr.: 当たり前だ、E. S. 相手に通常兵器がたばになったって、かなうもんかよ。

シオン: E. S. ――もしかして、それはあの天の車で出現した？

Jr.: そうだ、あの機体さ。渡り合うには、一星系の方面軍、まるまる一個は必要だぜ。

そいつが2機――ってことは、アルベドのシメオンと、アシェルか――？

???：いや、違う。

2機とも、未確認の機体だ。おそらくはU-TIC機関が復元したものだろう。

Jr.：カナン！

カナン：久しぶりだな、ルベド、そして、ケイオス。

⇒ [サブストーリー8：カナン篇](#)

Jr.：ちっ、ガイナン・クーカイ・Jr.だって言ってんだろ。

カナン：昔の印象が強くてな。だが、呼び名を変えたところで、本質が変わるわけでもあるまい。

ジギー：（呼び名——なんだ、このレアリエンの物腰、なにかが引っかかる——）

カナン：——なにか？

ジギー：——いや、なんでもない。失礼した。

（記憶にノイズが残っているのか——？）

Jr.：それよりカナン、お前こんなとこでなにやってんだ？ それにその怪我。

——まさか天の車の戦闘で！？

カナン：俺の身体の心配よりも、今は上空の敵機の迎撃を優先させた方が賢明だ。そのために、ここへ来た。

Jr.：なに？

カナン：天の車でシメオンと接触したことで、アシエルは稼動停止してしまった。

ケイオス：そうか、アニマの器の共鳴現象——

カナン：ああ、そうだ。天の車の大気圏突入に巻き込まれ、俺は機体ごと海に放り出された。

E.S.でなければ今頃、欠片も存在していなかっただろう。

Jr.：シメオンは、アルベドは、どうなった！

カナン：わからん。俺とともに到着に巻き込まれたはずだが、向こうもE.S.だからな。

Jr.：そうか——

—————

シオン：——それで、迎撃するためには、どうしたらいいの！？

カナン：ケイオス、お前の力が必要だ。

ケイオス：——アニマの器を、復調させなくちゃならない、か。

カナン：アシエルは自治政府軍に回収され、ポイント2107の地下基地に運ばれた。——急いでくれ。

ケイオス：—————

Jr.： どうしたんだよ、ケイオス。

ケイオス： ーいや、なんでもないよ。わかった、すぐ行こう。

シオン： 私たちも行くわよ、KOS-MOS。

アレン： ええっ、なんでそんな！

シオン： 軍基地へ行くまでに、みんなになにかあったらどうするの。

KOS-MOS、あなたに彼らの護衛を命じます。

二局への到着が遅れるけど、かまわないわね。

KOS-MOS： はい、当地におけるヴェクター・インダストリー関係者の安全、

並びに社有財産を保護するため、一時的に優先されるべき指令であると判断します。

シオン： ーというわけだけど、問題ある？

アレン： いえ、ありません。微力ながら、僕もお供します。

カナン： 話はまとまったようだな。急ぐぞ。

Jr.： ああ！

ー

ヘルマー： ーーそうだ、防衛戦力をむやみに E. S. に立ち向かわせる必要はない。市民の避難を優先させるのだ。

ああ、お待たせしましたー

ヴィルヘルム『いえ、火急の事態だというのに、お時間をいただいているのはこちらですから。

それにしても、天の車の出現に続いて、尋常ならざる事態ですね。』

ヘルマー： まったくです、市民の不安も、高まりつつあります。

ヴィルヘルム『しかし、その結果、我が曙光がその危機にいわせることになったとも言えます。

第二ミルチアのためにお役に立てること、嬉しく思いますよ。』

ヘルマー： どういうことでしょう？

ヴィルヘルム『侵入してきたのは、E. S. 2 機。互角に渡り合うには、最低でももう 1 機、E. S. が必要でしょう。』

ヘルマー： まさか！

ヴィルヘルム『すでに技官とともに、大気圏へ降下中です。

貴政府の許可をいただく前の独断専行で申しわけありませんが、非常事態と認識していたものですから。』

ヘルマー： ー

ヴィルヘルム『お詫びというわけではありませんが、存分にお使いください。

搭乗者によっては、十分に U-TIC 機関の E. S. に対抗できるはずです。』

ヘルマー：――感謝します。

（――今は信じるしかあるまい。彼らなら、ヴェクターの思惑に踊らされはしないと――）

――

カナン：市街地では、U-TIC 機関の兵士が破壊工作を繰り返している。気をつけろ。

カナン：ケイオス、お前は先を急げ――ぐっ。

モモ：ひどい傷――！

ケイオス：ここは僕たちにまかせて！

――

シオン：あの――

カナン：――なんだ？

シオン：カナンさんってレアリエンですよね、でも、三局でも見たことがないタイプだから――

モモ：記憶素子が増設されているみたいですけど、情報収集用レアリエンですか？

カナン：ほう、さすがは百式プロトタイプだ。俺は十四年前からミルチア自治政府に貸与されているが、
その際に E.S. パイロットとして調整されている。当時のヴェクターにな――

シオン：じゃあ、Jr. くんやケイオスくんとは、昔から――？

カナン：ああ、ミルチア紛争時の戦友というか、腐れ縁というか。

シオン：（Jr. くんはともかく、ケイオスくんも十四年前に――）

Jr.：なにやってる！ 先急ぐぞ――！！

シオン：ごめん！

（ひょっとしてこの中では、モモちゃん除いたら、私が最年少――？）

――

ジギー：む、追いつかれたか。

Jr.：こいつらが、未確認の E.S. か――

ジギー：アルベド機ではないな。

Jr.：ヤツにしちゃ、紳土的すぎるぜ。

ケイオス：（これはガドとヨセフ？ まさか、こんなに早く復元されるなんて―――
いや、違う！ この機体は―――）

リヒャルト：久しぶりだねえ、元気そうじゃないか。

Jr.：この声――リヒャルトとか言ったな、あいつか！

リヒャルト：偉い偉い、よく覚えていてくれたね。

ヘルマン：E.S.がある以上、以前のようにはいかぬ。百式プロトタイプを渡してもらおう。

モモ：―――！

Jr.：欲しけりゃ実力で――って言うまでもねえよな。

おまえ、”実力行使”って言葉、大好きだろ。

リヒャルト：――もちろん。要求ってものは、最初から吞まれちゃつまらないよねえ。

Jr.：わかりやすい性格だぜ！

（――おい、カナン。みんなを連れて、地下に潜ってくれ）

カナン：（いいのか？）

Jr.：（こっちもE.S.がなきゃ、勝負にならねえだろ。しばらく時間を稼ぐ

勝ち目はねえけど、逃げまくるくらいなら、なんとかなるって）

カナン：（わかった、死ぬなよ。アシエルを起動させるまででいい。）

Jr.：（――相変わらずだな、あんたは）

リヒャルト：ねえ、作戦会議は手短に頼むよ。

ヘルマン：リヒャルトさま、猶予を与える必要はありません。――撃ちます。

リヒャルト：ヘルマン、勝手なことをするな！

ヘルマン：くっ！

シオン：KOS-MOS！

KOS-MOS：シオン、敵弾を回避し続けることが戦術目的であるならば、私が最適任者であると判断します。

ジギー：たしかに、その通りだ。

シオン：でも、KOS-MOS――あなたは大気圏突入時のダメージが――

KOS-MOS：無論、それを考慮に入れた上での判断です。

リヒャルト：ふふふ、いいねえ。そこの坊やより、君の方が壊しがいいが有りそうだ。

醜い残骸を見せてもらおうか！

シオン：わかったわ、KOS-MOS、フルモードで対処しなさい！

アレンくん、みんなと一緒に行って！ 技術者も役に立つはず！

アレン：しゅ、主任はどうするんです！

シオン：私は KOS-MOS とともに戦う！　――急いで！

アレン：で、でも――いや、そうだ――わかりました、主任！

急いで戻ってきます！　それまで――

シオン：絶対に死んだりしないわよ！　当てにしているから！

アレン：はいっ！

リヒャルト：行くぞ、ヘルマン！

ヘルマン：了解です！

――

モモ：シオンさんと KOS-MOS さん、大丈夫でしょうか？

アレン：モモちゃん、主任たちを心配するなら、先を急いだ方がいい。

二人は君を逃がすため、いまでも戦ってるんだ。

Jr.：そうだ、モモ。今日ばかりはアレンが正しい。

アレン：今日ばかりはって――

カナン：なにをやっている。先を急ぐぞ――

アレン：あ、はい！

カナン：こんなところまで、U-TIC 機関が入り込んでいるのか。

――

ジギー：これが、E. S.　――

カナン：ああ、ミルチア自治政府が持つ切り札――アシェルだ。

ケイオス、診てくれるか。

ケイオス：うん――

やっぱり、アニマの器がダウンしている。復調しないと。

（本当なら、E. S. など、使わずにすませたい――

でも、いまはそんなことを言っている場合じゃない

すべて、君のシナリオ通りなのかい？）

カナン：発進ゲートはこっちで制御できる。できるか？

モモ：わかります、まかせてください。

―――！

上空から墮落してくる物体があります！

あ、いえ、違います！ 姿勢制御しましたー接近してきます！

ジギー：こちらにも別動戦力を送り込んできたか。

カナン：ゲートに激突する。開放してくれ！

モモ：はい、閘門[こうもん]開口します！

――間に合わない！

Jr.：モモ、伏せろっ！

モモ：きゃあああっ！

Jr.：無事か、モモ――

モモ：はい――Jr.さん、あれ――

Jr.：シャトルか？ 乱暴な降下してきやがって！

アレン：こ、これは――ヴェクター[うち]のシャトル！？

ミユキ：どうも～～～ヴェクター・インダストリーよりお届け物で一す！

ハンコもらえます？

――なんちて。

アレン：な、なんでミユキちゃんがここに！

ジギー：お届け物だと？

カナン：カーゴベイ、開けさせてもらうぞ。

ミユキ：あ、ハンコがまだ――

――

カナン：やはり、E.S.――！

ケイオス：ゼブルン――

アレン：ミユキちゃん、いったいどういうことなんだ？

ミユキ：それはウヅキ主任にご説明いたしまーす。受取人は主任ですから。

アレン：その主任がたいへんなんだよ。はやく助けに行かなくちゃならないんだ！

ミユキ：ええっ！？ CEOが『ウヅキ主任の役に立つだろう』って持たせてくれたのに――！

ケイオス：（やっぱり――これは、君の意志か――）

カナン：事情はわからんが、使ってかまわんのだな。

これなら E.S. 同士、二対二だ。勝負になるかもしれん。

モモ：ええ、はやくシオンさんと KOS-MOS さんを助けにいかないと――！

ジギー：だが、パイロットはどうするのだ？ 見たところ、2 機とも、複座型に見えるのだが――

Jr.：カナンは、戦闘に耐える身体じゃねえだろう。

ケイオス：そう、ここにいる人間がやるしかない。

僕たちが――E.S. を使うんだ。

――

シオン：KOS-MOS、返事をして、KOS-MOS――

KOS-MOS：損害――甚大――戦闘続行――不、能、指、揮、担、当、者、は、
離、脱を――

シオン：！ 言語中枢にダメージ！？

ううん、AI の問題じゃない、ハード側の機能低下――

まだ、まだもたせて、KOS-MOS――！

リハルト：うふふ、いい壊れっぷりだよ。でももっとだ、もっと壊れて、醜い残骸をさらしておくれよ！

ヘルマン：リハルトさま、アニマの器に反応が！ E.S.！ 地下からです！

リハルト：いいところなのに、無粋だねえ！ 天の車に現れたヤツだろうけど、こっちは 2 機！

E.S. の残骸は、アンドロイドよりも醜いのかなあ！ たしかめてやるよ！

ヘルマン：来ます！

向こうも 2 機だと！

リハルト：へえ――残骸が 2 倍だ、嬉しいなあ――

KOS-MOS：シ、オン、いまの、う、ち、に脱、出を――――

シオン：KOS-MOS――！

アレン：主任、もう大丈夫です。こっちへ！

シオン：アレンくん――？ コ、KOS-MOS が――

アレン：――――！

とりあえず、KOS-MOS を安全なところへ運びましょう。戦闘がはじまりますから――！

—

カナン：アニマの器はどうだ？

ケイオス『共振は僕が抑え込む、問題ないよ。それより、ゼブルンの二人にレクチャーしてやってくれ。』

カナン：承知した。

ミュキ：バックアップは、私とカナンさんにまかせてください！

—

ケイオス：アニマの器の出力を一定に保って！ 頼りすぎちゃダメだ！

Jr.：わかった！

ヘルマン：ちいっ、こいつら——E.S.の戦いに慣れている？

リヒャルト：生意気なんだよぉっ！

ジギー：不思議だ、こんなものを操るのは初めてのはずなのだが——

モモ：なんだか、すごく馴染んだことをしているような——

ケイオス：その感覚を忘れないで！ さあ、決めるよ！

【 E.S.戦 VS スキュータム、パイラム 】

ヘルマン：リヒャルトさま、お退きください！

リヒャルト：わかってるよ、E.S.を失うわけにはいかない！ 遊びはまだ終わりじゃないからね！

ジギー：勝った——のか？

モモ：索敵有効圏外へ離脱していきます。残存勢力は見あたりません。

Jr.：よっしゃあ、勝ったぜ！

ケイオス：（この勝利——君の好意、それとも、悪意なのかい——？）

Jr.：シオン——

モモ：シオンさん——

ケイオス：—————

シオン：KOS-MOS——

KOS-MOS：—————

シ、オンーあ、あなたの方、無事を、
確認でき、て、幸い、です。

――――

アレン：大丈夫です、主任。

筐体はひどくやられたけど、AI もブラックボックスも、たいしたダメージは負っていません。
すぐ直りますよー

シオン：でも、KOS-MOS の筐体は――

ミュキ：筐体なら、あります。

シオン：ミュキー？ あなた、なぜここに――？

ミュキ：E.S. を届けに来たんです。すみません、遅くなって――

シオン：ううん、そっかそれで――

あなたに助けられたみたいね。

ミュキ：先輩――

私、E.S. を届けた後は、二局で KOS-MOS のバックアップをするよう、命じられてるんです。

シオン：二局で？ KOS-MOS の？

アレン：そうらしいです、主任。もともと、いまの KOS-MOS の筐体は模擬戦用のものだったじゃないですか。

ミュキ：二局で、ようやく完成したんです。KOS-MOS の、実戦用筐体が。

シオン：KOS-MOS の、実戦用筐体――

アレン：いきましよう、主任。KOS-MOS は甦る――いや、生まれ変わるんです。

シオン：――――

――――

――わかったわ。ありがとう、ミュキ、アレンくん。

行きましよう、二局へ。

KOS-MOS を、再生させるために――